

単元全体を見通した Take Action! Talkの指導



鈴木 悟
(東京都立両国高等学校)

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます



はじめに

現在、高校生を指導しているが、最近は社会の要請や時代の変化に即し、「総合的な探究の時間」がより活発に展開されている。学校の外で評価を受ける機会も増加し、ビジネスアイデアやSDGsに関するコンテストが行われ、高校生向けのアントレプレナーシップ教育プログラムも官民で提供されている。社会と学校が一層連携し、生徒たちに実社会で必要な「課題解決能力」などのスキルや資質を養うことが促されていると言える。

そのような時代においては、英語の授業を通じて、生徒に「自己PDCAサイクル」を自在に働かせる力、つまり「学びに向かう力」や「学習方略」を身につけさせることが重要だ。これを実現するためには、「メタ認知」や「自己調整」などの要素が欠かせない。

そのために、NEW CROWNでは、単元全体を大きく2つに分けて進めることが効果的だ。一方は、基本的なスキルや知識を伝える場

面(Lesson)での指導、もう一方は生徒が主体的に活動に取り組む場面(Take Action! TalkやProject)での指導である。

単元計画を策定する際に、前者の場面では、Take Action! Talkの活動に向けた基礎を築くために、生徒に対話文などを理解させ、音読練習を十分に行わせる。

後者の場面では、ペアで協力して対話文を理解し、既習の知識を活かしながらオリジナルスキットを作成する。その際に、二次元コードや辞書を活用し、ペアで協働して計画的に練習させ、クラスの前で発表させる。最後に、発表までの過程の「ふり回り」をして単元を終える。

こうして「ふり回り」での自己の課題や改善点を次の単元に活かすことで、言語スキルの向上だけでなく、コミュニケーションや問題解決能力を発展させることができる。

1年 Take Action! Talk 2に向けたアプローチの例

Lesson 4 の指導例

教科書本文を理解して、音読できるようになったら、「Read and Look up」、「教師との対話練習」、「生徒同士の役割練習」、「プラスワンダイアログ」(生徒に対話の流れに即したオリジナルの英文を付け

加えさせる)などの手順で、対話を広げ、継続する力を身につけていく。一連の過程は、Take Action! Talk 2のスキット発表の原稿作成の一助となり、また、発表に向けた練習方法を体感することにもなる。

Take Action! Listen 1 の指導例

Lesson 4に続くTake Action! Listen 1の3rd Listeningでは、巻末資料のAudio Scripts (スクリプト)を見ながら音声を確認する。ここではスクリプトを活用する3つのステップが示されているが、Read Aloud & Checkでは、生徒が主体的に学ぶための練習として扱うことができる。生徒は最初にスクリプトを読み、発音できなかった箇所を把握し、その後、二次元コードの音声を聞きながら練習する。再び音声を聞かせて、自分の読み方との違いに気づかせて練習する。このように普段の音読練習でも、教師主導の“Repeat after me.”でのくり返しから脱却したい。Take Action! Listenのページ下のSoundsでは、単語の発音に焦点を当て、強く発音する部分に印をつける活動を行う。ここでも、音声を先に聞かせるのではなく、既習

の知識を活かして、個人またはペアで印をつける部分を予測させてから聞かせるとより効果的だ。自らの理解を深めて練習することで、次のTake Action! Talk 2でも、日本語(サンドイッチ)と英語(sandwich)の音声の違いを意識しながら発表練習をするようになる。

補足すると、一連の言語活動の中で、3rd Listeningでスクリプトを音読することは、次のTake Action! Talk 2でオリジナルスキットを作成する際のヒントとなる。例えば、スクリプトの“First, we recommend chicken *ramen* from Tao.”という英文から、生徒は、“What do you recommend?” “I recommend”といったやり取りを作ることができる。また、“You can choose one of three toppings”という英文を参考にしてtoppingsの内容を変

更したり、“Today you get a drink for free.” “You get a free dessert with it.”などと店員の最後の台詞を選択して、それに応

答する様々な相づちを考えるなど、会話を広げることができる。

Take Action! Talk 2の導入～スキット作成～発表

単元の中で生徒が主体的に活動する場面として、Take Action! Talk 2では、「スキットを作って発表すること」を目標に設定する。1年にある4つのTalk（道案内／フードコートでの注文／体調不良／手伝いのお願）を学期ごとに取り上げ、スキット大会を開催するとよい。単元の中の学びを活かすことで、原稿を作らせずに短時間で、個性ある多様な発表が可能である。

しかし、「注文」のような特定の場面では、多様な対話文が生まれにくく、内容面でオリジナリティに欠けることがある。反対に、スキッ

ト作成時に独創性を追求し過ぎると、生徒が「言いたいこと」（未習事項を含む）と「言えること」の差が大きくなり、辞書に頼って聞き手の共感を得られない発表になることもあるだろう。

前述の指導例に加えて、小学校で学習した「注文」の場面に関連した馴染みある表現（既習の知識）や、Lesson 4の旅先での食事に関する表現（新たな学び）を、スキットの内容に加えてもよい。食べ物の注文時に、旅行先での思い出を語るなど、無理なく表現豊かな発表をすることができる。

Take Action! Talk 2の「ふり返り」

前述の指導例と発表の実践を通じて、言語の実用性を実感させ、言語スキルの向上だけでなく、実社会で不可欠なスキル（「自己PDCAサイクル」をまわす力）を養うことができる。そして、この過程で最も欠かせないのは、発表時の自己の「ふり返り」である。スキット発表の前に、「評価用紙」と以下の「ふり返り」を配布し説明を行う。

- ① 前回の発表の課題から改善した点
- ② 他の発表を見て参考になった点
- ③ 今回の発表で（前回と比較して）成長できた点
- ④ 次回の発表に向けての課題・改善点
- ⑤ その他コメント・感想

生徒たちは自らの発表や他のグループの発表をふり返り、何がうまくいったか、どの部分を改善すべきかを自己評価する。さらに、後日、生徒の「ふり返り」を抜粋して紹介したり、他のクラスの発表を録画したものを、学年全体でロールモデルとして共有したりして、再度フィードバックを行う。これにより、「自己PDCAサイクル」の一環として、他者との様々な違いを意識して、自らの成長できた点や課題を明確にし、次の発表に向けた目標を設定する力を養うことができる。

このような発表活動とふり返りを組み合わせることで、生徒たちが単元全体を通じて主体的に学び、「学習方略」の改善と修正を行い、「メタ認知」や「自己調整力」を伸ばしていくことが期待できる。

おわりに

最近では、多くの学校で、ProjectやTake Action! Talkのスキット活動を含むアウトプットの言語活動が増えてきた。その中で、「発表」と「ふり返り」を経て、次の「『類似した』発表」に向かうというサイクルがより意識されるようになった。この一連のサイクルでは、単元の始めから発表までの過程をふり返り、次の発表に向けて、個々の課題を改善して「再挑戦」していくことが重要だ。最終的には、生徒がこのサイクルを通じて「成功体験」を積み重ね、「自己肯定感」を

高めることで、「自己PDCAサイクル」を内在化することが期待される。これが生徒の主体的な学びを引き出す一助となる。

この一貫性のある学習サイクルは、生徒たちが課題に粘り強く向き合い、英語力を向上させる鍵となり、さらに、実社会で生涯にわたり必要な資質や能力を育成していくことにつながる。これらを念頭に置いて、今後も授業改善やよりよい単元計画の策定に努め、生徒たちが意欲的に学び続けられる環境づくりに貢献していきたい。

今日まで、そして明日からも ～クラウンに育てられた半生～

Tom, Susie, Blakie が登場する *Junior Crown* で英語を学び、英語科教員となった年に *NEW CROWN* が発刊され、平成5年度版からは著者の一人に加えていただいた。ことばの教育の本質を熱く訴える森住衛先生、鋭い眼光で教科書の何たるかを熱く語った伝説の編集長、研究会に行けば必ずいる、おそらく日本で最も多くの授業を参観したであろう実直な営業担当の姿は強烈な印象として残っている。以後、「人間教育」「知的好奇心」「多言語、多文化主義」「アイデンティティ」など、学ばせてもらったことは枚挙にいとまがない。著名な大学の先生も私のような一介の中学校教員も、分け隔てなく教科書づくりに携われる体制も素晴らしい。今日まで、そして明日からも、**真に国際社会の一員たるにふさわしい人格を育てるのは、やはり NEW CROWN でしょ!**



重松 靖
(国分寺市立第一中学校)

NEW CROWNとわたし